

あー、校舎が火だるまに

(旧職員) 市川 恭子

(旧姓 田中)

これは苦い思い出である

飛行機の爆音

大粒の雨が一気に降って来たような異様なザアツ ザアツという音、直撃だな!!と思った。昼間空襲で突然耳にしたと同じ音だ。

四月十三日その日は赴任して初めての宿直の日だった。大きな学校に宮崎先生と私の二人が当番に当たっている。心細いなどといったはいられないと自分に言いまかせ。朝、「交戦国アメリカの大統領ルーズヴェルトが昨十二日急死」と報導されたので、空襲も休業を願っていたのだが……

夜空は晴れ上がっていた。午後十時半を過ぎた頃だったと思う。警戒警報が発令された。早速深谷穆明先生と加藤紀夫先生が応援にかけつけて下さった。重要書類はお二人の先生で埋めて下さった。女手だけでは到底穴さえ掘りきれなかっただろう。この時ほど男性の頼り甲斐を感じたことはない。

学校には大阪の部隊が駐屯していたが、警報が出るといつしか地上から姿を消してしまっていた。私達女性も壕に入り中で様子を見ることにした。

やがて「壕も安全とはいえない。出た方がよいのでは」。との加藤先生のご忠告で職員室前の金魚池の辺に移った。異様な音を聞いたのはその直後である。伏せた私達が顔を上げた瞬間目にしたものは何とそのころの両国の花火より数倍美事な光景だ。まるで昨年横濱の花火事故を思わせるようだった。

消夷弾は講堂側の校舎の二階、講堂よりの一教室に集中しておちた、よりよってその教室には天井まで机や椅子がところ狭しと積み重ねてあった。初期には直撃された部屋も兵隊さんが動きまわりバケツで水をかけている姿が見えたが、火勢が強く教室内の人影はまもなく消えた。部屋をなめるように火がまわり容赦なく窓から火が吹き出す。私はただ茫然と立ちつくしていた。立っいても熱風で体が熱くなってくる。学校の周りでも火の手が上がっていた。

「早く逃げた方がいい、火の海になったら逃げられなくなる」。加藤先生のお言葉に後髪をひかれながらも、毛布一枚をか、え、煙にまかれぬようにと池の水につけた手拭をマスクがわりにして戸山ヶ原に逃げた。

その後も深谷、加藤両先生と豊島のおじさんが残り更に重要書類を埋めたり防火扉をしめたりして火勢のまわった学校からやつと脱出なさったとかだった。

原には時限爆弾の跡というすり鉢状の穴があった。そこで学校の焼け落ちる様子をみながら一夜をあかした。

火勢は所得顔とばかり翼のついた大蛇がのたうちまわるような勢でコの字なりにぐんぐんのび校舎をなめつくしていった。あつという間の出来ごとだったように思う。百メートルは離れている避難場所にてさえいつまでも熱気は衰えなかった。

白々とした朝を迎えること焼跡に立った。足元はまだくすぶつて白っぽい煙を立て、いる所もある。防火壁が三本、体育館の鉄さんと、外壁の下の方の一部（海城側）が焼けたゞれた無残な姿をとゞめたにすぎない。校舎は燃え落ちてしまったのだ。胸がつまり涙があふれてくる。学校から新宿にかけて辺りは見渡す限り焼野原に様が変わりしてしまっていた。

今でも赤い焰、燃える音、くずれ落ちる校舎が眼に浮ぶ。手をこまねいて何も役に立たなかった私が恥かしい。命がけで働いて下さった深谷、加藤両先生・豊島のおじさんに心からお礼申します。

有難うございました。